



造園業／庭師

植昭 長岡造園

長岡 秀晃さん

京都府立北嵯峨高等学校出身
2007年社会学部卒業



庭師が100人いれば100通りある庭づくり。
大切なのは、施主に合った庭づくりを見極めること。

長岡秀晃さんは、京都の嵯峨嵐山に程近い植昭長岡造園で、庭師として造園業に携わっています。植昭長岡造園は、曾祖父の代から続く造園会社です。主な業務は、禅宗の大本山相国寺の庭園の維持管理のほか、町屋庭園のデザイン・作庭・維持管理まで多岐にわたります。「多くの観光客が訪れる相国寺で、自分が関わる庭を見てもらい、興味を持ってもらえることにやりがいを感じます」と言います。

長岡さんにとって、祖父や父をはじめとする庭師は身近な存在でした。大学時代に植昭長岡造園でアルバイトをする中で、樹木の剪定や石を据える職人の背中を見て「自分も一つの道を極めたい」と思うようになり、造園業の道に進むことを決めたそうです。

造園業は昔ながらの職人気質で、上下関係に厳しい人も多いため、人とのつながりが重要な職業でもあります。そのため、学生時代に体育会バレーボール部の活動を通して、目上の方への礼儀、人との接し方を学んだことが今でも役立っているのだとか。また、ゼミの指導教員である永井良和教授からは書籍などから得る知識だけでなく、実際に足を運び、自分の目で見て考えることを学んだという長岡さん。「今は、ウェブサイトで情報を簡単に得ることができずし、写真をもとに打ち合わせもできますが、実際に現場状況を確認しなければ、正しい見積もりや作業ができないため、必ず現場に赴き、施主がどんな庭造りや管理を要望されているのかお聞きするようにしています」と続けます。

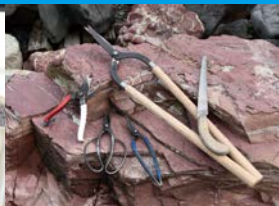
明確な要望がない時には、実用性を求めるのか、見た目を重んじるのか、雑談も交えて要望の本質を引き出すよう心掛けていているという長岡さん。庭づくりでは、この「用」と「景」の割合を見極めることが大切なのだそうです。「景」の割合が大きければ、見た目を重視した庭になりますし、逆に「用」の割合が大きければ、実用性が高くなるように工夫を行うそうです。

庭づくりの現場はもちろん、社会では多くの人と関わりながら何かをつくりあげていきます。そのため、アクシデントはつきものですが、段取りが狂うこともあります。どんな時でも「臨機応変に対応できる柔軟性を持つことが大切」と話します。同時に多くの職人や業者がいる現場では、普段から互いの技術の話や雑談をすることで、仕事がスムーズに進むそうです。

良い仕事をするためにコミュニケーション力と雑談力は欠かせません。「学生生活では、勉強はもちろん、クラブ、趣味、資格の取得、遊びなど、打ち込める何かを見つけて全力で取り組んでください。一つのことを極める中で多くの人と関わり、コミュニケーション力や柔軟性が身に付くはず。先の先まで見据え、最終の目的を把握していれば、その場に合った柔軟な対応ができるようになります」とアドバイスをくれました。

ある1日の
スケジュール

7:30 出社・準備
8:30 現場に向かう
9:00 施主との打ち合わせ
10:00 現場状況確認
(写真撮影)
11:00 デザイン・企画
12:00 昼休み
13:00 手作業での剪定作業
17:00 掃除・片付け
18:00 帰社・事務作業
19:00 帰宅



必須アイテムは、剪定の際、樹木に応じて使い分ける刃物類。大ばさみなどは祖父から受け継いだもの。

Landscape gardener